

# 春雨

弘化三年（1846年）作

作詞 佐賀藩士 柴田花守  
作曲 長崎丸山 花月の遊女

春雨に志つぱりぬるる鶯の  
羽風に匂う梅が香や  
花にたわむれ 志おらしや  
小鳥でさえも一筋に  
埒さだめぬ 気はひとつ  
私しや鶯 主は梅  
やがて身まま記満まになるならば  
サア 鶯宿梅じやないかいな  
サツサ なんでもよいわいな



# 春雨（現代語訳）

春雨に志つぱりと濡れてしまった鶯の  
その羽ばたく風で 梅のように わたしの袖の香が  
あなたのまわりに漂っているのです  
梅の花のあなたに 一寸といたずらをしている  
鶯のわたしは ねえ、可愛いでしょう  
小鳥でさえも一筋に思うように  
あなたとの寢屋を決めて 浮気なんかしないわ  
だから、わたしは鶯で、あなたは梅だってば  
やがてわたしの年季証文が明けたなら  
サア、あなたとわたしは鶯宿梅のようになるかしら  
一緒になれるのなら もう何でもいいや  
サツサ、今夜は飲みましようよ



## 【解説】

有名な小唄の一つ「春雨」は、新人の若子さん達が春ともなれば、日本中の花街で踊る演目である。  
この唄は何と、武士の作詞である。柴田花守は、江戸時代後期に佐賀鍋島藩の小城支藩の武家に生まれた。弘化三年、柴田が三十七歳の頃、フランスの軍艦三隻が長崎に入港し、彼は藩命により長崎警護に出生したのである。幕府直轄地の長崎は、佐賀藩と福岡藩が一年毎に交代で警備に当たっており、佐賀藩にとって軍事上の情報収集の地であった。彼は春雨の詩を丸山町の遊郭、花月で書いている。曲は、その時に柴田のお相手をした、花月の遊女の作である。この小唄は、当時、七、八年に渡り、全国で大流行した。三味線の伴奏とともに、今でも踊り継がれている。踊りは後に、長崎検番の師匠が振り付けをしたとあり、今でも長崎芸妓衆の優雅な演目である。  
柴田花守の生誕地である今の小城市には、嘉瀬川がある。福岡との県境にある背振山脈から流れ出て、有明海に注ぐ。その支流の祇園川は、源氏螢の名所である。祇園や螢という言葉の響きは、何となくロマンティックな長崎旅情を思い起こさせるのではあるまいか。  
長崎では、諸兄も「悪業橋」のたもとに立って、行くか、帰るかを迷われたかも知れぬ。馴染みの小女郎には逢いたい、路銀は少ない。ウくん、どうしよう。そう、有名な「丸山」という花街に向かう橋である。

## そこに店を出す「花月」は立派な史跡料亭として今も在る。

広い庭には時季により、長崎の諏訪神社の祭礼である「長崎くんち」の蛇踊りの蛇が飾られたりする。料亭の柱には坂本龍馬が付けたとする刀傷が残されており、史跡観光に供されてもいる。無論、花月では長崎名物の単車料理も食べられる。

小城藩士 柴田花守は和歌、書画に秀でていたので、こうした端唄もお手のものであったろう。雅号は「琴岡」とあり、長崎県東彼杵町の大音琴郷を発祥とする琴岡姓に由来するものであろう。  
東彼杵は、シュガーロードとして名高い長崎街道の宿場町である。その地の人には琴岡の姓が多い。それを雅号としたのは、柴田が長崎との往来で出会った、思い出の人の名前であったからかも知れない。

柴田は古事記や神道の神典にも通じており、不二道第十世教主を継ぎ、後に富岳信仰を加え、教派神道の一つである神道実行人の教祖となった。今日においても柴田花守の遺徳を偲び、地元の小城公園で、四月上旬の桜の季節に、長崎芸者衆が踊る「春雨まつり」が開催されている。

さて、小唄にある「鶯宿梅」とは、和歌の故事による。曰く、  
勅なればいとも畏し 鶯の  
宿はと問はば いかか答えむ

## 平安京の清涼殿にあった、村上天皇お気に入りの梅が枯れてしまったので、替りの梅を蔵人所の侍者に探させたところ、ある役人の屋敷に見事な梅の木が見つかった。屋敷の者に事情を話し、梅の木を掘り返して持ち帰ったのだが、その枝には和歌が結んであった。歌は、

「帝の勅命なれば、畏れ多いことです。梅の木は献上申し上げますが、毎年、春になれば梅の枝に飛んで来ていた鶯に『私の宿はどこにあるの』と聞かれたら、私はどう答えたら良いのでしょうか」と云う意味である。これを読んだ村上天皇は、梅の木はこの屋敷にあったのかと問ひ質されたところ、紀貫之の娘（紀内侍）の屋敷と判明した。梅の木は父貫之が娘に残したものだと言った村上天皇は、「済まぬことをした」と、その梅の木を返された」と「大鏡」（平安時代の歴史物語）にある。

鶯と、宿となる梅の枝は、円満な夫婦仲の象徴として調度品にも描かれる図柄である。小唄に登場する遊女は、鶯を可愛い自分とし、梅の枝を頼りがいのある家として、即興で三味線を弾いたことだろう。

鶯宿梅にまつわる和歌を、もう一首ご紹介しよう。  
色よりも香こそあはれと思はゆれ  
誰が袖ふれし宿の梅ども

詠み人知らず（古今和歌集）

## なかなか色つばい歌である。意味は、

梅の花は、その色より香りの方が良いなと思うのだけれど、鶯宿梅の故事にあるように、一体だれの袖を抱き寄せて梅は匂っているのだろうか。

ま、現代ではこんな感じなのでしょうが、作者が生きた時代は「ふれし」と婉曲に書かれている。袖に触れただけでは香り香は生じないでしょうから、「あなたを抱きしめたから、あなたの匂いが梅の私に移ったのだよ」と男は言っている歌ですな。前半は、女の匂いは魅力的だなあと云う隠れた前置きに過ぎない。さて、読者である鶯の貴女は、どんな匂いのする人なのでしょう。ああ、香しき人よ。

もう、観梅の季節は過ぎようとしている。今日は桃の節句。梅の次は桃、桃の次は桜である。そして難祭り、桜祭りとも来れば、春雨は終わって五月雨となり、五月の節句が来る。ああ、鯉のぼり、恋い昇り。

「五月雨」とくれば芭蕉の句が浮かぶ。長唄、菖蒲浴衣の季節である。

令和三年三月三日

大中臣正比呂 拙訳

